

当科におけるOHP療法約10年間の統計的観察

鈴木卓二* 樋口道雄*
古山信明* 大塚博明*

千葉大学中央手術部において、昭和49年1月より昭和58年5月までの約10年間に、OHP療法を施行した症例につき、その年次別変動および主要疾患の治療成績などを報告する。

当施設の高圧酸素治療装置は、Vickers社製のone man chamberで、純酸素下にて、ほとんどの症例に対し、10ポンド(約1.8ATA)から14ポンド(約2ATA)まで加圧した。治療時間は、症例により多少異なるが、加圧、減圧時間も含めて、70~90分であった。

治療を受けた症例数は合計566例で延治療回数は、7,861回におよび、1症例あたりの平均治療回数は13.9回であった。

症例を疾患別にみると、突発性難聴が197例と最も多く、全体の35%を占め、次いで腸閉塞の179例(約32%)、末梢血管循環障害52例(約9%)、脊椎、脊髄系疾患の43例(約8%)の順になっている。その他、ガス中毒6例、網膜動脈閉塞症3例などであった(表1)。

性別でみると、男性320例、女性246例で、男女の比は5:4であった。

年齢では、生後7日目の乳児から85歳にわたり、平均36.6歳で、30歳~50歳までが全体の54.3%を占めていた(表2)。

年次別症例数と治療回数をみてみると、昭和48年にはわずかに4症例に99回治療したにすぎなかったが、翌昭和49年には約10倍の49症例に642回治療を行った。以後年とともに次第に増加し、昭和57年には93症例に1,080回の治療を行っている。な

お昭和54年度に症例数、治療回数ともに著しく減少しているのは病院移転のためである(図1)。

つぎに、主要疾患の症例数と治療回数をみると、突発性難聴では197例に3,430回の治療を行い、1症例あたりの平均治療回数17.4回である。腸閉塞では179例、927回、1症例あたり平均5.1回、末梢血管循環障害は52例、975回、平均18.7回、脊椎、脊髄系疾患は43例、818回、平均19.5回、悪性腫瘍は17例、208回、平均12.2回であった。

表1 O.H.P 治療患者の疾患別症例数
(S.49.1~S.58.5)

疾患名	症例数	中止例数	延治療回数	平均治療回数
突発性難聴	197(34.7%)	14	3430	17.4
腸閉塞	179(31.9%)	10	927	5.1
末梢血管循環障害	52(9.1%)	10	975	18.7
脊椎脊髄系疾患	43(7.9%)	7	818	19.5
悪性腫瘍	17(3.0%)	2	208	12.2
難治性潰瘍	13(2.3%)	3	387	29.8
顔面神経麻痺	11(1.9%)		258	23.4
内分泌系疾患	11(1.9%)		288	25.4
メニエル症候群	7(1.2%)		135	19.3
耳鳴り	6(1.1%)		89	14.8
急性ガス中毒	6(1.1%)		62	10.3
瘻孔	6(1.1%)		81	13.5
皮膚移植	5(0.9%)		61	12.2
脳血管障害	4(0.7%)		44	11.0
慢性骨髄炎	3(0.5%)	1	27	9.0
網膜動脈閉塞症	3(0.5%)		40	13.3
薬物性肝炎	1(0.2%)		12	12.0
空気塞栓	1(0.2%)		1	1.0
腎出血	1(0.2%)	1	1	1.0
計	566(100%)	48	7861	13.9

*千葉大学医学部附属病院手術部

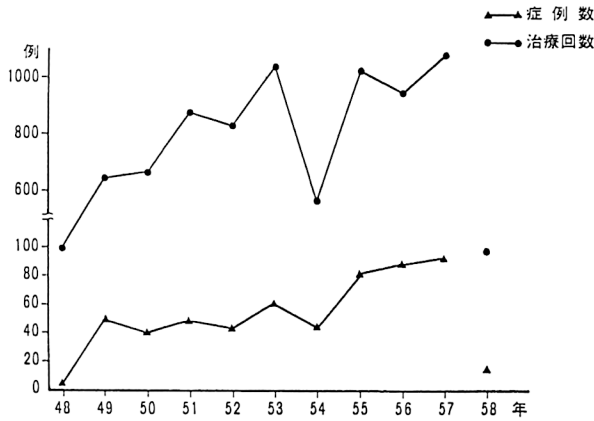


図1 年次別症例数と治療回数

表2 OHP 治療患者性および年齢別

年齢	性別		計
	男	女	
1カ月未満	2	1	3(0.5%)
1歳未満	22	11	33(5.8%)
1～9	29	33	62(10.9%)
10～19	11	25	36(6.5%)
20～29	26	24	50(8.8%)
30～39	61	44	105(18.6%)
40～49	55	49	104(18.4%)
50～59	62	36	98(17.3%)
60～69	32	17	49(8.6%)
70～79	16	6	22(3.9%)
80歳以上	4		4(0.7%)
合計	320	246	566(100%)

主要疾患の年次別症例数の変化をみると、突発性難聴は昭和53年度には36例で全体の約60%を占めていたが、昭和54年度には一時著しく減少し、以後次第に増加して昭和57年には27例で全体の約30%を占めるようになった。これに対し腸閉塞は、昭和53年度には12例、約20%であったが、昭和55年度より著しくその数を増し、昭和57年度には47例で全症例の約半数を占めるに至った。

末梢血管循環障害、脊椎、脊髄系疾患、悪性腫瘍などは、年次的に数の変動はあまりなく10年間の平均ではそれぞれ年間5例、4例、2例の割合であった(図2)。

昭和53年度以前を前5年、昭和54年度以後を後5年とし、主要疾患の前5年と後5年の症例数を比較すると、腸閉塞が16例から163例と著しく増加

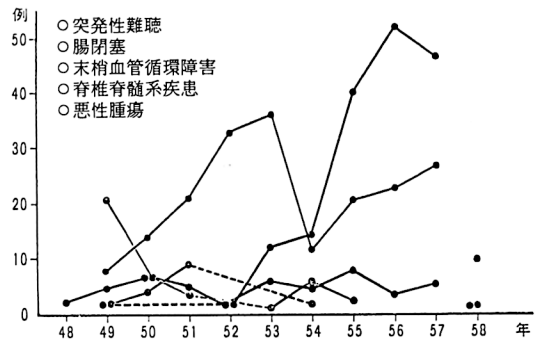


図2 主要疾患の年次別症例数の変動

表3 主要疾患の OHP 治療成績

疾患名	全症例数	中止症例数	実症例数	有効数	無効数
突発性難聴	197	14	183	128(69.9%)	55(30.1%)
腸閉塞	179	10	169	134(79.3%)	35(21.7%)
末梢血管循環障害	52	10	42	30(71.4%)	12(28.6%)
脊椎脊髄系疾患	43	7	36	23(63.9%)	13(36.1%)

表4 イレウスに対する OHP 治療成績

年齢	治療成績	
	非手術	手術
大人81例(45.3%)	63例(77.8%)	18例(22.2%)
小児98例(54.7%)	81例(82.6%)	17例(17.4%)
	計	144例(80.4%)

手術成績の内訳:
 大人: 癒着14例(77.8%), 絞扼4例(22.2%)
 小児: 癒着9例(52.9%), 絞扼8例(47.1%)
 計: 癒着23例(65.7%), 絞扼12例(34.3%)

しているのに対し、突発性難聴は112例から85例とやや減少し、その他の疾患は25例前後ではほぼ平行という傾向がみられた。

つぎに、主要疾患の治療成績をみてみると、有効であったものが、突発性難聴では実症例183例中128例で約70%、腸閉塞は169例中134例約80%、末梢血管循環障害が42例中30例、約70%、脊椎、脊髄系疾患は36例中23例64%で、各疾患とも良い成績であった(表3)。

なお治療を中止した症例数とその原因をしらべてみると、突発性難聴は14例約7%中止し、その原因は心理不安が5例で最も多く、耳痛4例、合併症3例であった。腸閉塞は10例中止し、その原因は合併症が7例であった。

最後にイレウスに対するOHP療法を検討した。まず症例を大人と小児に分けてみると、179例中大人81例(約45%)、小児98例(約55%)となる。

大人の場合、非手術例すなわちOHP療法で治療した症例は63例で約78%、手術を施行したものは18例、約22%であった。手術所見は高度癒着14

例、約78%、絞扼4例、約22%であった。

小児の場合は、非手術例8例、約83%、手術例17例、約17%で、手術所見としては高度癒着9例、約53%、絞扼8例、約47%であった。

全体としてみれば、非手術例が144例で約80%、手術例35例、約20%で、手術所見では高度癒着23例、約66%、絞扼12例、約34%であった(表4)。

以上、当手術部の最近10年間のOHP療法の統計的観察を行ったが、ほぼ満足すべき成績をあげているものと考えられる。今後益々成績を向上させるべく努力したいと考えている。